

—ハバクフ1章・2-3、2・2-4、2ティモテ1章・6-8、13-14、ルカ17章・5-10—

使徒たちが、「わたしどもの信仰を増してください」と言ったとき、主は言われた。「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。あなたがたのうちだれかに、畑を耕すか羊を飼うかする僕がいる場合、その僕が畑から帰って来たとき、『すぐ来て食事の席に着きなさい』と言う者がいるだろうか。むしろ、『夕食の用意をしてくれ。腰に帯を締め、わたしが食事を済ますまで給仕してくれ。お前はその後で食事をしなさい』と言うのではなかろうか。命じられたことを果たしたからといって、主人は僕に感謝するだろうか。あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです』と言いなさい。』—ルカ17章—

信仰の道

神が私たちを招いて、信仰の道を歩むよう支えてくださる、その「信仰の道」とはどんな道なのでしょう？

時々私たちは「信仰を増してください」と祈りますが、主は私たちのの中に、からし種一粒ほどの信仰の存在も見出しはおられないことに私たちは衝撃を受けてしまいました。

人は、神の絶対性、その深さ、広さが理解できませんから、大方は、自分の裁量で把握した神理解の信仰心をいくらかでも持っているつもりでいるのかもしれない。

しかし、信仰とは、神を尊び、絶対的に従う事と言われますから、そうであれば、足りないとか、薄いとか言えるレベルのものではないのでしょうか。「ある」か「ない」か、あるいは「本物」か「そうでない」か、どちらか

なのです。本物であれば、神に従うことがすべからぬのですから、そこには憂いも恐れもなくなり、下世話な諺ですが、「嫌なお人の親切よりも、好いたお方の無理がいい（サタンの御利益より神の十字架を選ぶ）が現実となつて「信仰の道」が全てを可能にすることを学ぶ人になるでしょう。

本物でないなら、主よ、主よと口にしながら十字架を厭い、わたしたちは、うしろめたさを繕うために「信仰を増してください」と言っているのかもしれない。でも実際は信仰がないのですから「信仰をください」と祈るべきだとイエスは教えられておられるのです。

信仰は、私たちが自ら獲得するものではなく、十字架の死を持って愛を示したキリストから与えられて得る恵みです。そ

れゆえ、神の計らいをすべて尊び、主キリストの生き方に絶対的に従う信仰を下さいと願うのです。世に、罪のない正しい人々が不正の横行や外国からの圧迫の中で苦しむのを神が許されておられるのも、神は誰の滅びも望んでおられず、定められた時のために忍耐して神が高慢な者の回心を待たせておられることを思い、正しい人は全ての人が救われる福音のために苦しみ耐え忍ぶことを「信仰の道」によって受け入れるのです。信仰は神が救いのために私たちに与える神の力だからです。

2022年10月2日

主任司祭 昌川信雄

